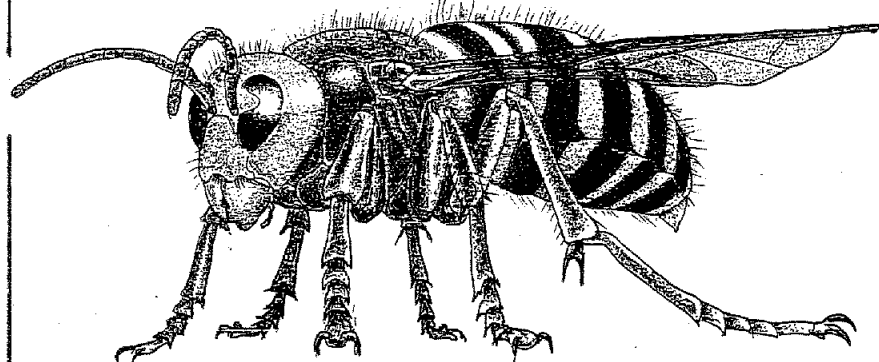




オオスズメバチ 女王

(スズメバチ科)

学名 *Vespa mandarinia*

英名 Asian giant hornet

体長 41 mm

黒と黄色の縞模様は自分が危険であることを知らせる警告色である

標本にして描画 (生きていては危なくて描けません)

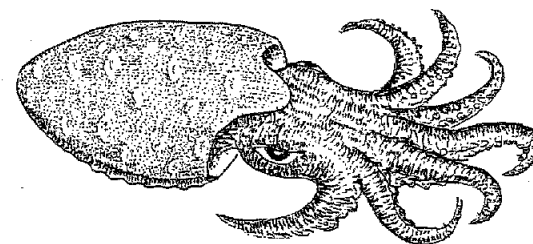
5月11日、用務員さんがスズメバチを校長室に持ってきた。捕虫網の中のそいつは動きが鈍い。「弱っていて、様子がおかしいからチョイと」中庭にいたのを網で捕ったらしい。「これはオオスズメバチですな。この時期のものはすべて越冬した新女王なんです。」と、言葉の通じない凶暴なオオスズメバチを前に冷静にウンチクを述べる博学の理科教師を演じる。その割に捕虫網から名刺ケースにハチを移す手つきはややぎこちない。

これまでもオオスズメバチは何度も捕獲してきた、昔勤めた中学校では駆除業者が大きな巣を掘り起こしたものをもらって、生きている幼虫やさなぎ、羽化直後の成虫を観察し液浸標本にもした。しかし生きた成虫の絵はまだ描いていない (これまで描いたハチの絵は9割が死体である) ので、「いっちょやっつたろうかい!」と思ったが、グズグズしているうちにハチはケースの中で多量の体液を出して苦悶し死んでしまった。この体液は尾端から出た様子で独特の臭いがあり毒液ではないかと思われる。ハチは自らの毒液により中毒死したのかもしれない。この毒液には仲間を呼ぶ警戒フェロモンが含まれているという。女王はSOSを発信したのかもしれないが、まだ働きバチのいない時期でよかった。

「自分の毒で中毒とは気の毒だが、死んでしまった以上は仕方ない」持ち帰って、体がかたまらないうちに、昆虫針で格好よく展脚して乾燥剤と共に密封容器に入れた。乾燥してかたまるまでは腐敗しないように冷蔵庫で保存したいのだが、うちの冷蔵庫に入れた場合、様々な困難な問題が生じると予想されたので室内に置いた。

オオスズメバチは樹木の洞や根元の穴に巨大な巣をつくるが、これは昨年の秋に生まれ巣を離れて冬を越した新女王が1匹で作り始める。女王は越冬前に雄バチと交尾して精子を蓄えており、作った巣で受精卵を産み、餌を与えて育てて働きバチにする。数を増した働きバチは巣を拡充し、女王が次々に生む卵と幼虫の世話もして大家族を形成する。秋になり幼虫の餌となる昆虫が減る頃には巣の中では次の女王と雄バチ (王バチ) がたくさん生まれる。晩秋には働きバチはすべて死ぬが、新女王とオスバチは巣を離れ、新女王は別の巣の雄と交尾する。雄バチは死ぬが新女王は朽木の中などで越冬する。したがって巨大になった巣は冬には1匹のハチもいない空き家となり、1年で放棄される。

オオスズメバチは危険だとして人に駆除されるが、多くの毛虫芋虫を捕らえて森の緑を守っている。また西洋ミツバチが野生化して在来種のハナバチを追いやってしまうのを防ぎ、結果的に在来種のハナバチとそれに受粉を依存する在来植物との関係を守っている。人間の都合で駆除すると森が荒れ、思わぬ昆虫や植物が姿を消すことになる。

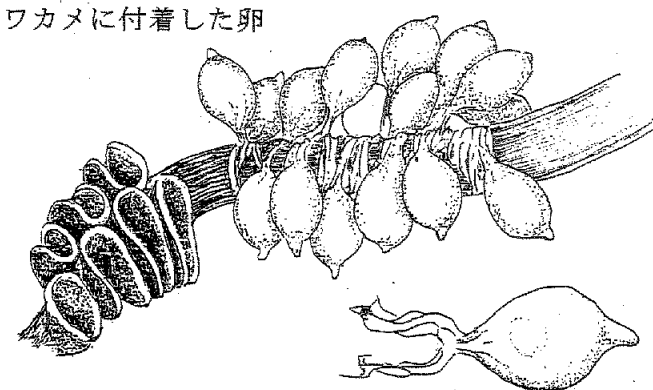


コウイカ (コウイカ科)

学名 *Sepia esculenta*

英名 golden cuttlefish

ワカメに付着した卵



コウイカの卵 長径20 mm

5月8日、再び私は大塩の浜を訪れた。当然浜は引潮である。昨夜の波が打ち上げた潮間帯の漂着物の中から、さっさと夕飯用のナマコ3匹を確保したのち、ゆっくりと漂着物を搜索していく。割れた茶碗のような灰色の薄い物体が砂浜に落ちている。これは弾力があり、一見プラスチックの樹脂のように見えるが、ツメタガイの卵塊で「砂茶碗」と呼ばれる。薄い板状に固められた砂の中に無数の微小な卵があるらしいが、見たところではわからない。表面は磁器のようにつるつるしている。近年この浜ではツメタガイの貝殻がずいぶん減った。餌となるアサリが減っていることと関係があるかもしれない。

散らばったアオサの下に黄色い「中華麺」のようなものがかたまっている。これはアメフラシの卵塊である。うまさうだが毒があるといわれている。他にイタリアンスパゲティのような薄紅色をした麺も見つかったが、これもアメフラシの卵塊のようだ。

波打ち際に打ち上げられたワカメの太い茎 (藻類は根・茎・葉の区別がないが見かけ上) に、たくさんの白い球がついているのを見つけた。イカ釣り漁船の集魚灯のような紡錘形で直径は2 cm ほどある。太い柄でワカメに付着している。触るとプヨプヨと水風船のように弾力がある。持ち帰って調べるとコウイカの卵であるとわかった。明かりに透かすと中に5 mm ほどの黄色い球が浮いているのが見える、卵黄だろうか。コウイカはちょうど初夏のこの頃が産卵期で、7月には卵が孵化して、生まれた稚イカは小魚やエビなどを餌にして成長するが、その成長は速くて1年後には産卵し一生を終える。つまり寿命は1年ということになる。1匹のメスは2000~3000個もの卵を産むらしい。

コウイカ (甲烏賊) という名前の由来は、外套膜 (頭のような胴体の部分) の中に石灰質の甲 (こう) を持っていることによる。同じ軟体動物の仲間である巻貝や二枚貝の貝殻に当たるものだと思うが、タコにはこのようなものはない。スルメイカには石灰質の甲はないが、セルロイドのような細長くて薄い透明な軟甲を持っている。これは石灰質の甲が退化したものらしい。イカはカタツムリ派、タコはナメクジ派だといえる?

山口県の萩で海に潜ったとき、透き通った海の水面近くを漂う小さなイカの群れを見たことがある。半透明の体は蜃気楼のようで空中に浮いているように見えた。足をそろえて浮かぶ姿は初めて見たときイカだと気付かなかった。近づくときばやく泳いで視界から消えてしまった。水質は良くなったという播磨灘だが、海底にはたくさんのプラスチックゴミが沈んでいると思う。そんな海でもコウイカはたくましく繁殖しているようだ。